

ある在日巫俗寺院の 開創儀礼と社会的ネットワーク

飯田 剛 史

はじめに

- I. 大阪における済州島巫俗
- II. 巫俗寺院の開創
- III. 開創儀礼の過程
- IV. シンバンと在日の民俗宗教世界
- V. 寺をめぐる社会的ネットワーク
- VI. 在日社会における済州島巫俗文化の変容について

はじめに

移民社会で、母国の伝統文化の幾つかの要素が母国以上によく保存されていることは、アメリカのさまざまな移民研究のなかでしばしば指摘され、移民社会の現在において本国の過去が生きている現象を指して「人類的現在」などと呼ばれることがある。

しかしこれを単に過去の残存と見るべきではない。新しい生活環境のなかで、生活文化の総体はつねに変容し、ある要素は消滅しあるものは改めて選択し直される。残される要素はその時々ので生活のなかで新たな意味と機能を付与されるとみるべきである。

在日コリアン（ここでは韓国籍ないし朝鮮籍をもって、あるいは韓国人ないし朝鮮人という自己意識をもって日本に定住する人々をさすことにする）の生

活とそれを取り巻く社会状況は、時と共に変化しました多様化してきている。衣食住、言語などの生活文化領域においても、日本人のそれとの同質性が著しく拡大しているが、そのなかで、本国の伝統的な民俗信仰が、オリジナルな形式を保ちつつ在日社会で盛んに行われていることは注目に値しよう。

筆者はこれまで、在日コリアンの最大の集住地域である大阪市生野区周辺の宗教文化についていくつかの報告を行ってきたが、今回は在日コリアンによる新たな「寺」の開創儀礼に立ち会った際の調査に基づき、そこでの儀礼過程と社会的ネットワークを報告し、その社会的文化的意味について考えてみたい。

その「寺」は、生駒山系の信貴山麓（大阪府八尾市郡山453-1）で1988年の夏に開創され、大興寺と名づけられた。寺を設けたのは在日コリアン（韓国籍）で済州島出身の金萬宝^{キムマンボ}シンバン（神房：済州島での巫者の呼称）である。この寺はそれまで大林寺といいやはり在日コリアンの夫婦が造り営んできたが、高齢化と病気のため活動を停止していた。金シンバンは、この寺と土地を購入し、建物を増改築したうえで、妻の玄金石^{ヒョンキムソク}さんとともにこれを新たに大興寺として開くことにした。生駒山地には、在日の人々の小さな「寺」が約60あるが（宗教社会学の会、1985）、済州島出身の正規のシンバンが自らの「寺」を創立するのは初めてであろう。その祭儀は7日間にわたって行われ、参加者は約150名におよんだ。

一般に儀礼は、定型化されたパターンの反復としてとらえられることが多いが、他面、一回きりの個別状況に応じて固有の祭次の組合せによって営まれる場合もあることを忘れるべきではない。大規模な儀礼は、願主にとっていわばその人生のクライマックスの一つを画する行事であり、ライフヒストリーの結接点でもある。とくに今回の一連の開寺儀礼は、在日社会の様々な民俗宗教の要素が複合している点で特殊なシンクレティズムの様相を呈している。それは、金萬宝、玄金石夫妻と関わりの深さまざまのタイプの宗教者たちが、儀礼のパートを担うために集合しているためでもある。またこの場には、彼等の信者や家族、親族、知人たちも参加しており、在日のこの夫妻をめぐる社会的ネッ

トワークが集約的に現われている。

したがって、今回の儀礼は、在日民俗宗教のあり方と社会的ネットワークの考察にとって、極めて興味深い事例となっているのである。

1. 大阪における済州島巫俗

現在の在日コリアン（韓国籍ないし朝鮮籍者）の人口は約68万人で、そのうち大阪府の在日人口は約18万人で、大阪を含む近畿地域で全体の約半数が居住している。なかでも大阪市生野区は人口約16万人のうちほぼ4万人が在日コリアンで、今日、日本で最大の集住地域となっている。生野区の朝鮮人街は1920年代より形成されはじめ（cf. 杉原薫・玉井金吾 1986, 金賛汀 1985）, その約7割が済州島出身者ないしその後裔である（cf. 洪承稷・韓培浩 1979, p92, 李光奎 1983, p131）。大阪の街中と生駒山系には、このような在日の人口状況を背景に、約百におよぶ在日の「寺」が作られている。

生駒山系は、大阪大都市圏の近郊にあつて、近世より現代に至るまでさまざまな民俗宗教が展開してきた場所である。われわれはそれを『生駒の神々ー現代都市の民俗宗教ー』（宗教社会学の会編, 1985年）として報告した。そのなかでも注目を集めたのは、約60ヶ寺の「朝鮮寺」と呼ばれる（「韓寺」という呼び方もある。cf. 曹奎通 1990/91）在日コリアンが戦後に作った寺の一群である。

生駒山系のほかにも兵庫県の六甲山系の青谷および山本谷にもこのような寺が数ヶ寺ある（cf. 曹奎通 1990/91）。また大阪市を中心に神戸市、尼崎市などの街中にも在日韓国・朝鮮人の寺が38ヶ寺存在するが、そのうち約3分の2はシャーマニクな祈祷活動を主とするものであり他はクツを行わない仏教寺院である（cf. 飯田 1989）。

「朝鮮寺」の多くは、1950年代から70年代に、在日の祈祷師達によって建てられた。それらの「寺」はもともと日本人の行者、祈祷師らによって造られた滝行場であったり、漢方薬製造の水車場の跡であったりしたものだが、在日の

祈祷師達はその弟子として寺を引き継いだり、あるいは権利を買ってそこに自らの寺を築いたのである。祈祷師たちは、女性の場合はボサル（菩薩）、男性はスニム（僧任）と呼ばれ、日本の山岳宗教である修験道の下級の僧位（権律師など）をもつ事が多く、占いと読経および憑霊によるシャーマニックな祈祷を行う。現在は、その第一世代から第二世代への転換がおこなわれる過程にあり、韓国で正規の修業を経た仏教僧（本来の意味での僧任^{スニム}）を住職として住まわせる寺も増えてきている。

寺はいずれも小規模（敷地で百坪前後）で、その基本施設は、仏像を安置し七星神、山神、海神の画像をまつる^{ゴフタン}法堂と生活施設である庫裏、およびクツ（賽神；韓国式の巫俗儀礼。在日社会ではより広い意味でシャーマニックな祈祷をさし、「拝み」ともよばれる）を行う建物である^{クツタン}賽神堂と滝行場からなっている。それ以外に七星神、山神、海神を祭る小堂を独立に設けている寺もある。

生駒の「朝鮮寺」は、韓国巫俗と韓国仏教および日本の修験道の要素が複合してできた新種あるいは雑種の「寺」であるが、その活動の中心はクツ（賽神）と呼ばれるシャーマニックな祈祷活動にある。クツにも幾つかのタイプがあり、シンバン（神房）は済州島巫俗の伝統に忠実なクツを行い、ボサル（菩薩）、スニム（僧任）たちは、韓国仏教、日本仏教、修験道などの要素が入り交じった儀礼を行う。

ボサルやスニムは、戦前に渡日し、貧苦の生活の中で巫病をとまなう憑霊現象を経験し、修験道を含むさまざまな修行をしながら祈祷師として自己の道を見出していった人々である。最初は一般の職業を続けながら、自宅の一部屋に祭壇を設けて祈祷活動をはじめが、専門化すると寺の看板を掲げる。町中の寺は、このような段階のものが多く、小規模な「拝み」は町中の寺や依頼者の家でもできるが、数日続くような大きな「拝み」は生駒などの山の寺を借りて泊まりがけで行われる。さらにその祈祷師の活動が盛んになると、自ら山に寺を造ったり、権利を買い受けたりして活動の本拠を山に移すのである。町の住居から山の寺に通うこともあり、また山の寺に住むこともある。彼等は、占い

や読経、霊降ろしや病気の祓いをするがその方法は、それぞれの修行の過程で習ったものや自分で作り出したもので、韓国仏教ないし韓国巫俗の「正規」様式のものではない。また最近韓国本土からポサルや占師の出稼ぎも盛んで、扉に赤い「卍」のマークをつけていることでそれと分かるアパートや民家を生野区の町でよく見掛けることがある。

一つの「拝み」（短くて数時間、長いもので数日にわたる）のなかで、ポサルとスニム、シンバン、占師など、在日の宗教者たちが小セッションを分担して協同することはしばしばみられ、これらの人々は、いわば「民間祈祷師」として一つの世界（業界）を共有している。たとえば、ポサルは信者の悩み事を聞くと、霊能や占いによってその原因を探る。それは大抵、不幸な死に方をした近親者の霊が信者に付きまといっているとためと判断され、その霊を安らかにあの世へ送るために、大きなクツが必要である事を依頼者に告げる。ポサルは、それを有力なシンバンに紹介し、シンバンがチーフとなるクツの中で厄祓いの部分を担当することがある。またスニムとポサルが夫婦であることも多く、この夫婦でクツをすることも多い。あるいは寡婦になった老齢のポサルが、韓国からきた仏教僧を寺に住まわせて、クツに参加させる例も多い。ただし、仏教僧は一般にクツの世界を低く見、あくまでそれに加わる事を拒否する人もいる。また修験仏教へのコミットが深いポサル、スニムで、シンバンとは仕事を共にしないと言う人々もいる。しかしシンバン達は、正規の伝統的な形式を備えている大規模なクツは自分たちしか出来ないと考えている（本国では一時、迷信として抑圧されたが、今日では無形文化財として再評価されている）。ともあれ、呪術的な死者霊供養を担うものとして、これらの人々の役割は相い通じるものであり、長時間にわたる仕事を分担する協力する条件を共有しているのである。

現在（1988年時）、日本で済州島の伝統的な巫俗儀礼を盛んに行うシンバングループは二つある。洪^{ホン}海鵬^{ヘボン}氏のグループと金氏のものである。洪（通称徳山）氏は済州島のシンバンの家柄にうまれ戦前期12才の時日本に来て、父親から訓

練を受けた。金氏は1930年に済州島に生まれて父親の下でシンバンの修行をし、戦後來日して定住している。以前には大阪府茨木市にも高山昌浩、大阪市の鶴橋に金長玉という有力なシンバンがいたが今は高齢で活動していない。さらに現在、済州島からシンバンの行き来が盛んに行われ、一時的にこれらのグループに加わったり、ポサル、スニム達とチームを組んで活動している。

3日から一週間くらいのクツは、生駒の寺を借りて盛んに行われており、なかには十日におよぶ大規模なものもある。数時間で終わる小さな「拝み」は、龍王宮（宗教社会学の会 1985, pp.293-6）という大阪市内の淀川畔にある在日専門の祈祷所で行われることが多い。さらに、葬式の後のクイヤンブリ（死者の口寄儀礼）、節分前後におこなわれる信者の家のお祓いなど、在日の祈祷師たちは多忙である。

II. 巫俗寺院の開創

大興寺の前身である大林寺は、昭和27・8年頃に、^{イチャング}李昌球（僧名慧山、1910年済州市生れ、戦前期に来日、天王寺区の雲水寺《統国寺の前身》の住職をしたことがある）氏と姜昌禁（僧名満月華）さんの夫妻が創った。李氏によると、ここにはその前にも韓国の人が作った寺があったという。その後、夫妻の病気のため、仏像を統国寺（大阪市天王寺区にある総連系で在日朝鮮人仏教会所属の仏教寺院）に預けて、実質的な寺の営みを停止していた。

金萬宝氏は、1930年済州道朝天面咸德里でシンバンの父のもとに生まれた。シンバンは差別される職業であり、彼はそれを継ぐことを嫌い、若い頃は青年団の迷信打破運動の先頭に立って、巫俗を絶滅させようとしたこともある。しかし原因不明の熱病に掛って長く苦しみ（巫病）、夢の中でこの道に入らなければならないことを告げられ、やむを得ずそれに従った。最初のシンクツ（シンバンの加入儀礼）は1957年に行った。子供が小学校へ行くようになるとシンバンの子とっていじめられるので、漁船を買って漁業に転じた。しかしそれは失敗し、彼はすべてを打ち捨てて1962年日本へ密航する。東大阪の木質アパー

トで寄る辺なく過ごすうち、在日のシンバン達から声をかけられクツに加わるようになった。ある時は坊さんになろうと宝徳寺（cf、飯田 1989）の趙南錫住職（1902年全羅南道生まれ、1927年に来日、42才の時僧になる、1959年に宝徳寺開山、1989年死去）にお経を習ったりもしたがちっとも頭に入らなかった。クツの本解（^{ボンブリ}巫俗儀礼で歌われる済州島の神話・伝説）なら一度聞けば全部覚えるほどだったのに。宝徳寺でも^{クツダン}賽神堂を借りてよくクツをやった。同業者どうしの競争は激しくまた妬みも強い。彼は何者かに密告されて当局に捕まり韓国に強制送還された。再度密航を企てるが船が難破して失敗。そののち、済州島でシンバンとして活発な活動を行い、大きなシンクツを二度を行ってシンバンの社会で最高の位（^{サン}上シンチュン）を認められた。

1976年に三度目の密航を行い、大阪の在日社会に住んでシンバンとしての活動を続けた。82年には入国管理当局に自ら出頭して特別在留許可を請願し多数の信者たちの署名を集めてそれを獲得した。東大阪市の瓢箪山の谷にある宝光寺（cf、飯田 1989）などでクツを行っていたが、83年に宋棋浩住職が亡くなるとそこで「主職」となった。寺の持ち主は宋氏の妻である朴福順ボサルである。翌年84年には宝光寺を出てすぐ隣の極楽寺「主職」となる。ここの持ち主は金蓮華ボサルで、「主職」というのは金氏がそこを主として活動していることを示すために名刺に刷った職名であるとともに、外国人登録証に記載される職場の名称および所在地を示すものでもある。したがって寺にたいする実質的な管理・運営権をもつものではなく、その地位は不安定でクツをそこで行う度ごとに使用料を持ち主に支払うのである。この間、彼は50才代半ばにあって、大阪のみならず関東にも活動圏を広げ、済州島巫俗の正統を伝えるシンバンとして最も多忙で充実した活動期を迎える。

1986年には、真言宗醍醐派（日本の修験道の宗派）より権律師という祈祷師の免状を得て、生野区にある自宅に「真言宗醍醐派 大興院」の看板を掲げた。彼にとって、これは修験道への実質的なコミットメントを示すものではなく、儀礼の大音響で町の人や警察官が苦情を言いに来た時など、この免状を示せば

自分たちのやっていることがすぐ了解されるという実際的理由があるからだという。

彼は、自分たちの道と仏教とは根本が同じであると考えているので（初公本^{チョゴンボン}解ではシンバンの祖先は三人兄弟の仏教僧であるという神話が語られる）、仏教には親近感を持ち、修験宗派の資格を得ることには何の矛盾もないと考えている。また韓国社会では仏教僧も伝統的に差別の対象となって来たが、シンバンよりステイタスが上とされており、自分を仏教者としてアイデンティファイしていくことは彼にとって好ましいことであり、在日社会では韓国本国におけるほど両者の峻別規制は強くなく、それは容認される可能性が高いのである。

彼は、自分のクツ活動の根拠地として、またシンバンであると同時に仏教者としてのアイデンティティを得るためにも、自分自身の寺を持ちたいと思い、良い条件の寺を捜していたところ、大林寺の信者で自分にクツを頼んだこともある人が話を仲介してくれたので、ここを買い取り、今回ようやく自らの力で寺を開くことになったのである。ただ寺の登記上の名義は妻の玄金石に譲っている。大興寺の名は、金石の外祖父が全羅南道にある同名の名刹を再建したことに由来するという。

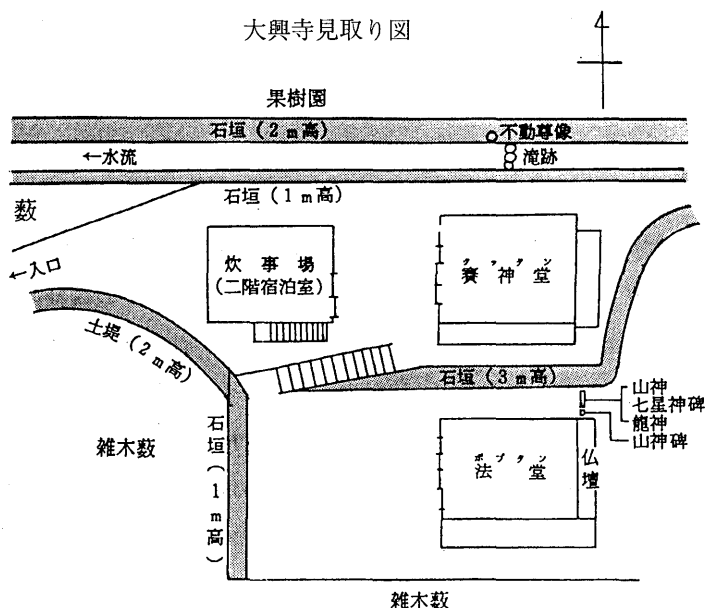
玄金石さんは、1936年、金と同郷の済州島咸徳里生まれ。シンバンや僧を出す家系ではなかったが母とその父は強い靈感を持つ人であった。本人も子供の時から不思議な夢をよく見た。54年日本に密航し様々な商売をするがだまされて大きな借金を背負う。成田山別院（大阪府枚方市）の不動尊に参詣したとき強い靈感にうたれ、それを機に霊能者としての道に目覚めた。彼女は人の悩みやその原因を直感的に言い当てることが出来るといい、そのような占いの相談を受けるとともにその原因となる死者霊の供養を行なうようになった。

80年には「夢のお告げ」により金氏を訪ね夫婦になった。二人は同じ村の出身であり、萬宝は金石の母をよく知っていたが、互いどうしはそれまで知ることではなかった。それぞれこれまでの配偶者との間に子供があるが、二人の間に子供はない。金石は萬宝の下でシンバンとして修行も始めた。1985年には在日

のシンバン金圭児（1907年生れ、1986年死去）より三種の巫具（^{シンカル}神刀、^{サンバン}算盤、^{ヨリヨン}揺鈴）からなる済州島の巫具）を譲り受けた。これを受け継ぐことはシンバンになるための必要条件の一つである（玄容駿 1985 p.472）。しかしシンバンとしての通過儀礼であるシンクッは未だ行っていない。通名は木下有美で、まわりの人から「ユミさん」または「姉さん」とよばれている。今回の大興寺のオープニング儀式は、シンクッではないが彼女の職業的霊能者としてのイニシエーション（加入）儀礼の要素も持っている。

約百坪の敷地は、北側に細い水流を隔てて果樹園があり、南には雑木の藪をはさんで古い社や民家がある。敷地は3メートルほどの段差で高低二段からなり、高い所に^{ボフダン}法堂（本堂）が、低い部分にもとの庫裏を改装した^{クツタン}賽神堂、および新築の二階建ての炊事・宿泊棟がある。水流には小さな滝行場が石で組まれていたが、金は住む者に病気をもたらし作用があるとしてこれを壊したという。今も高さ1.5メートルほどの滝の石組跡がある。本堂の横には七星神、山王神、龍神の石碑がある。

大興寺見取り図



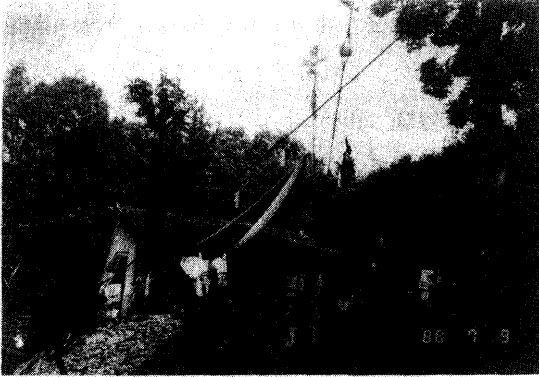


写真1 大興寺

この寺は、「山の寺」としては、最も人里近くであり、近畿日本鉄道の信貴山口駅から歩いて数分と交通にも便利であるが、かつては植木や果樹園であったところが徐々に住宅地化されている地域であり、付近住民との騒音をめぐるトラブル

が生じてきている。

Ⅲ. 開寺儀礼の過程

今回の大興寺の一連のオープニングの儀式は複合的で次の五つの要素からなっている。

- (1) 土地神の拝み、
- (2) 本尊の開眼法要、
- (3) 成柱^{ソジユ}プリ、
- (4) 船王^{ソナン}プリ、
- (5) 玄金石のイニシエーション

また副次的に信者の厄祓いと別の信者が持ち込んだ観音像の供養も行われた。

儀礼の中での言語は、ほとんどすべて韓国語で、法要での読経のほかは、済州島方言で語られた。儀礼以外の会話は、たいてい日本語で行われた。

金萬宝はシンバンであるが、自分のための儀礼を自分で行うことは出来ないので、他の同業者たちに執行を頼まなければならない。謝礼は一般のクツの場合の2倍が支払われる。われわれはこの一連の儀礼のなかで、彼をめぐる在日民俗宗教者のネットワークと種々の宗教者の間の協同関係において成り立つシンクレティズムの実態を見る事ができる。

一般にネットワーク分析では、個人は「点」として扱われるが、ここでは、このミクロな世界を匿名化することなく、できる限り一人一人を独自の個性と経歴を持つ存在者として固有名詞のまま記述したいと考えている。

8月27日の深夜から9月2日までの7日間にかけて行われた一連の儀礼過程と主な担当者をまとめると次のようになる。

- 8月27日 土地神拝み（李起鳳）
- 8月28日 落慶法要（金法満，李慧山，釈性大）
ソンジュ
成柱プリ①初監祭（秦富玉）
- 8月29日 読経（金萬宝）
ソンジュ
成柱プリ②セドゥリム（梁花珍）
炊事場読経（金法満）
玄金石憑霊，
ソンジュ
成柱プリ③神門開き（秦富玉）
玄金石憑霊，
信者厄祓い（梁花珍）
- 8月30日 読経（金萬宝）
ソンジュ
成柱プリ④姜太公首木手（秦富玉，高眞隆）
ソンジュ
成柱プリ⑤門前本解・送神（高眞隆）
ソナン
船王プリ①初監祭（秦富玉），
- 8月31日 読経（金萬宝）
ソナン
船王プリ②初監祭（読き），
ソナン
船王プリ③金萬宝，玄金石厄祓い（鄭玉順），
ソナン
船王プリ④供宴（玄宝倍），
ソナン
船王プリ⑤金萬宝厄祓い
- 9月1日 玄金石読経
ソナン
船王プリ⑥金萬宝トランチュム舞踊
玄金石憑霊，
淹法要（金法満）

ソナン
船王ブリ⑦雑鬼祓い（鄭玉順）

9月2日 玄金石憑霊，

ソナン
船王ブリ⑧厄祓い（秦富玉），同⑨豚供（秦富玉）

ソナン
船王ブリ⑩川流し（秦富玉）

これらの過程を一つずつたどって行くことにしよう。

8月27日

開眼法要の前夜11時過ぎから，土地神拝みが始められた。賽神堂室内の窓べに設けられた土地神の祭壇に向って，李起鳳氏による土地神の祭文の読み上げが始められた。

祭文は巻紙に筆写されたもので，「南無大極地神来助我 南無黄極地神来助我…」とあらゆる方角からあらゆるカテゴリーの土地神の名を呼んで加護を祈願するもの，これを三回読誦し，終りに米占い（米粒を一掴み放り上げ落ちてくるところを再び掴み受けてその数で祈祷の結果を占う）をする。つぎに部屋のまん中の畳とその下の床板をめくりあげ，床下の土を少し掘る。この上で土地神札を焼いて灰を落とし，その上に白い布を置き，砂糖水をかける。そして土を埋め戻し，床板と畳をもとに戻す。戸外では冥錢を焼く。午前2時この儀式は終わった。これは，巫俗とも仏教とも異なって道教の色彩が濃いものである。

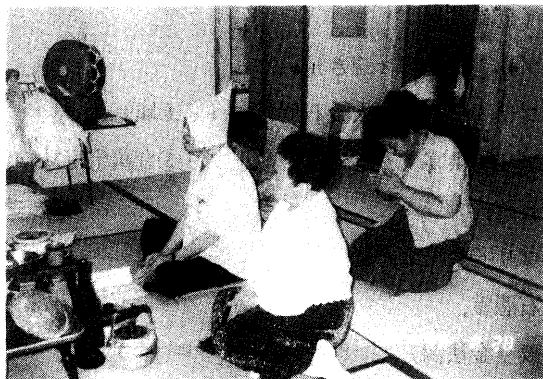


写真 2

土地神拝み

この儀式は李氏と介添え役として金如桃ボサルが行い、金萬宝、玄金石夫妻が参加し、参観者は筆者のみであった。李起鳳^{イキボン}氏は1901年済州島生れ、土地神拝みと択日などの占いを専門にするが、村ごとに異なる済州島のあらゆるクツに精通しているための在日のシンバンやその他の祈祷師たちから畏敬されている長老である（1990年に死去）。この人は済州島でチョンシ（정시）あるいは、地官、択日師とよばれる職能者に当たる（玄容駿 1985, p.53）。介添え役の金如桃ボサルは1911年生れで今は半ば引退しており、大きな拝みの依頼が来ると、金萬宝に回している。

8月28日

早朝、本堂の壁に次のような式次第が張り出された（本文は縦書き）。

「信貴山 大興寺落慶法要

式順

- 一、開式、転鐘
- 一、佛像点眼
- 一、三歸依禮
- 一、住職人事
- 一、祝 辞
- 一、勧供、献香



写真 3

紙の被いがかけられ
開眼をまつ本尊

一、四弘請願

一、開 式

成造儀式

一九八八年戊辰八月二八日」

朝八時過ぎ、本尊になる釈迦像と脇侍の不動像が業者によって納入され、本堂正面の壇上に安置され、紙の被いが掛けられた。

本尊を寄進したのは、李^{イチョンガク}惣角ボサルとその子息の家族である。李さんは同じ信貴山麓の大福寺（八尾市大窪69）という寺のボサルであった（宗教社会学の会 1985,p.287）。1917年（丁巳）慶尚南道東來^{トンネー}生まれ。日本にきて夫とともに大福寺を造り営んでいたが、最近はほとんど活動していなかった。その寺は水害を受けやすい危険地にあり、防砂ダム建設のため取り壊された。「寺の本尊仏は自宅に置いていたが、自分もう年なので他の人に譲りたいと思っていた。近くの信院寺の金法満スニムが、この寺（大興寺）を教えてくれた。金萬宝には、今年夫が死んだときクツを頼んだことがあった」という。

釈迦像には新たな金箔と彩色が施された。不動像は、別の信者が寄付している。

信者たちが30名ほど、本堂に集まってくる。大部分は中高年の女性だが、男性もいる。

司会は金仁培氏、萬宝と同郷の咸德里出身で、金属部品製造業のかたわら民団支部の役員をしており、仏教に魅かれるところがあって曹溪宗普賢寺（飯田1



写真 4

開眼会の読経

989, p.68) の創立など色々な寺の世話もしてきた。

本尊開眼会は、3人のスニム（僧任）、金法満、李慧山、釈性大の読経で始められた。

金法満スニムは1942年慶尚南道生まれ。名利海印寺などで修行し日本へは龍谷大学への留学生として来た。生駒辻子谷の清谷寺、妙覚寺などで世話になり、妙覚寺の梁雲華スニムの弟子格だった。今は大興寺の近くの信院寺の頼まれ住職となっている。

釈性大スニムも最近韓国からやってきた40代の僧であり、生野区の普賢寺にいたが今は同区に新しい寺（民衆仏教観音寺 cf. 飯田, 1989, p.69）を造るのに協力している。

李慧山スニムは今は引退しているが、この寺の前身大林寺の住職であった人である。

読経のあと、仏像を覆っていた白紙が取り除けられ（点眼）、さらに読経によって本尊に魂が込められる。本尊の手には五色の糸が結ばれ、それが天井を伝って部屋の真ん中に垂らされ、その端を寄進者李惣角が持つ。

金萬宝がここに新しい寺を興し、住職になった旨の挨拶をし、司会者が祝辞を述べる。信者たちが列をなして順に本尊の前にきて香を献じ合掌する。



写真 5

献香の列をつくる

信者たち

そのあと信者たちは、短かく切られた五色の糸を長生のお守りとして財布に入

れて本堂を出、屋外の七星神、山王神の石碑を拝む。多くの信者はそのまま帰途についた。

この儀礼過程は、仏教式にそして一連の儀礼過程のなかで最も多くの人の前で行われたが、それはここが仏教寺院であることを公に表明するために必要なことであった。

^{ソンジュ}成柱^{チョガムジュ}プリ①初監祭、

同日4時半頃から^{ソンジュ}成柱^{ソンジュ}プリが始まった。これは建物の新築時に、建物の神である^{ソンジュ}成柱神を祭る巫俗儀礼である。^{ソンジュ}成柱は韓国本土で一般に家屋の神をさす名称である。これを行ったのは、6名のシンバン（秦富玉、高眞隆、梁花珍、金保尹、玄宝倍、金如桃）と1名のボサル（鄭玉順）であった。主シンバンは^{チンブオク}秦富玉さんがつとめ、他のシンバンは、楽器を奏したり他の補助的仕事をする。

^{チン}秦シンバンは1922年済州島生まれ、現在も済州島で活動している。最近はしばしば日本に来て、金萬宝のグループでクッをしている。

^{キンボイ}金保尹シンバンも済州島在住で1928年生れ。

高眞隆氏は男性で1915年大阪生まれ。4才で父が亡くなり、父の故郷である済州島に戻る。12才で再び日本に来たが病気になりこの道に入らなければ死ぬと言われてシンバンになった。その後、プロボクサーになって人気を集めたこともあった。東京都安立区に住んで関東での済州島巫俗の中心的シンバンとして活動しており、金萬宝と親密で大阪と東京で呼んだり呼ばれたりしている。昭和40年には、金峯山修験本宗の免状をもらっている。

^{ヤンファチン}梁花珍シンバンは1927年生れ。

^{ヒョンボペー}玄宝倍シンバンは1917年生れでともに済州島出身であるが長く大阪に住んでいる。玄宝倍は高齢で半ば引退しているが、金萬宝の最初の来日の時より長くチームを組んで来たので、今回は自ら助力を買って出た。

^{チョンオクソン}鄭玉順ボサルはシャーマンの霊能が強く、このグループとよく一緒に仕事をしている。後日のインタビューで^{チョン}鄭さんは次のように語った。

「済州島の城山浦で大正15年に生れ、8才の時お父さんが死んだので、母に

連れられて兄弟とともに大阪に来ました。暮らしは貧しく、チョーセン、チョーセンとっていじめられました。学校には一辺も行ったことないし、机に座ったこともありません。戦時中（昭和20年）に結婚し、炭を焼く主人と飛騨古川の山中に流れて行きました。乞食のような生活でした。大阪に戻って縫製の仕事をしていたが37才の頃、家族皆が病気になり、私は気持ちがいいになりました。夜中に叫びながら街を走ったこともあります。人から『山に行きなさい』と言われ、山本の最明寺滝（宝塚市）やその上のお不動さんに何度も参っているうちに頭がすっとしてきました。その近くの宝教寺（cf. 曹奎通 1990/91）の前の先生にもお世話になりました。そのうち自分に『靈感』があることに気が付きました。来る人にどんな霊が付いているのかぱっと分かるようになりました。というて十が十当たるわけやないけど。オガミをせんといかん時は、うちらには難しいことは分かんので、萬宝さんに日にちを聞きにいった一緒にします。子供らは初めはこの仕事に反対していましたが、もう何も言いません。時どき気分が落ち込むこともあります。高野山には毎年お参りに行きます。四国八十八ヶ所も4～5回まわり、インドに団体で仏教遺跡巡りに行ったことも



写真 6

カムサン キ
監床旗をもって

舞うシンパン

あります。今はええ時代です。」

落慶法要が営まれている間、シンバンたちや数名の親しい客は、賽神堂^{クツタン}で休憩していたが、法要が終わると、そこに祭壇を設置し、（三棟のための）三輪の切り紙の花、甑餅、果物、水を供え、祭壇の前に神聖な柱を象徴する笹竹を一本立てる。屋外では二本の大竿が立てられそれに結ばれた赤青黄、赤白青の長い布が、神々が通る橋として、室内まで引き延ばされ天井に張り巡らされる。正装した秦シンバンが、成柱^{ソンジュ}プリの初監祭^{チヨガムジェ}を始める。初監祭^{チヨガムジェ}は巫俗儀礼の一単位の始まりごとに行わねばならない過程である。玄金石がどうしてこの道に入らねばならなかったのかその過去来歴を語り、これから良い霊が付き占いがよく当たるようにしてくださいと祈願を述べる。つぎに金萬宝がこれまで歩いてきた道を語り、最近良い仕事をしていることの感謝と持病治癒の祈願を述べる。そして神門の門番に供物を差し上げる。太鼓、カネ、ドラが囃すなか、シンバンは監床旗^{カムサンキ}（神の依代となる紙の人形を柄の先につけたもの）をもって激しく舞う。

また、木魚を叩きながら経文をもって舞う。そして夜9時前になってやっと成柱神^{ソンジュ}の門が開いたところで、この日の儀礼は終わることになった。食事の後には杖鼓^{チヤング}の伴奏で皆が思い思いに踊り出して遊んだ。これは神々を喜ばせる意味がある。

8月29日

この日は成柱^{ソンジュ}プリアが続行され完了する予定であったが、玄金石が長時間強い憑霊状態になったため、成柱^{ソンジュ}プリアは明日に持ち越されることになった。

朝7時20分から1時間、金萬宝が本堂で読経。ラジカセのマイクを持って境内に聞こえるように読経を流す。「住持になったのでこれから毎朝続けるつもりだ」とのこと。

9時からセドゥリム（邪祓い）が始まった。金萬宝、玄金石が祭壇前で梁花珍シンバンによって祓いを受けていると、玄金石が突然うつむき、目をつぶっ

て眉根を寄せ、占い錢をつかんで前に投げつけ、そして鈴を持って座ったまま回り始めた。強いトランスにあることが見て取れる。そのまま後ろに倒れたところを鄭ボサルが赤い布で祓う。金石は座り直してシンバンの青い衣装を振り回し、親戚の食母（炊事婦）と抱き合っ^{シモ}て泣く。良家の娘に生まれたのに苦しい生活を経てこの道に入らねばならなかった自分の運命を嘆いているのだと回りの人ももらい泣きしながら説明する。また金石の母が降りているようだという。やがて興奮は静まるが、祭壇の前で鈴を振ったり笑ったりする。つぎに立ち上がって激しく舞い始める。杖鼓^{チャング}、ドラ、カネの囃子が加わる。布を体に巻き付け、杖鼓^{チャング}をぶら下げ、またパラン（小シンバル）を持って舞う。玄宝倍シンバルによると、「あの人のお母さんはオガミ師ではないが非常に性格の強い、神とも話が出来る人だった。いや、まだもう一人の霊が憑いている。それはおじいさん（母の父）の霊だ。とても偉い人で仏教を深く信じていたが、後を継ぐものがいなかったのでユミさんに跡取りになるように言っている。ユミさんの兄弟も、反対をやめてユミさんがこの道に入ることを認めなければならないということだ。」この強いトランスはようやく正午12時前に静まった。

濟州島ではシンバンや僧、祈祷師などの職能は、血筋によって受け継がれるものと考えており、金石の場合、この一連の儀礼のなかで、職能者ではなかったが霊能が強かった母と祖父の霊を改めて憑けることによって自らの霊能者としてのアイデンティティを確立し表明しようとしているのである。本堂の柱には、金石の母の朱の手形が押された「遺言状」（ハングル文）が張り出されており、その内容は次の通りである。

「霊法と技術を玄金石にお授け下さい 病気を見る道術と神通力を玄金石にお授け下さい 八万諸大神将様お助け下さい」

しかし、この降霊の儀礼には筆者にとって幾つかの疑問点が含まれている。すなわち、①金石はすでにすぐれた占いの直感と憑霊の能力があることが認められているので、この霊着けの儀礼は、実際にその能力を得るためというよりは、むしろ職業的な霊能者としての金石を社会的に再定義することに比重がか

かっている。②しかし金石の霊能者としての職能は、シンバンになるのかポサルになるのか曖昧なままになっている。③金石に着く霊とは何であるのか？母と祖父の霊だけではないらしい。萬宝によると本堂の祭壇脇にある小さな供物膳は、「^{チヨワン}天王」を祭るもので、これがこの日金石に乗り移った神で、祖父の霊はそれに付いて来たという。また金石本人によると自分に着く神さんは成田の不動さんであるという。金石に付くこの神霊が何であるのか、筆者にはきわめて曖昧であるように見えるが、当事者は特にそのこと問題にしているようには見えなかった。④誰がこの寺の住職になるのか？ 実質的な創立者は金萬宝であり落慶祭でも彼は住職として挨拶をしている。しかし、登記上の名義は彼女に与えられた上、大興寺という名は金石の祖父がかつて全羅南道で再興した寺の名をとっており、この祖父の霊を憑ける儀式を行っているのだから彼女もこの寺の住職と主張する根拠はあるだろう。しかし両者ともに仏教僧としての訓練は受けておらず、クツの仕事で多忙でもあるため、実質的な「住職」では有り得ないのである。結果としては、このあと韓国から来た若い仏教僧を住職として住込ませる形になっている。

別棟の炊事場では10時頃から、調理台上に果物、餅、飯、水が供えられ、その前に次のように記された紙榜（原文は縦書き）が立てられ、金法満スニムによる読経が行われた。

「南無左補處擔柴力士



写真 7

トランス状態で

笹をうち振る玄金石

南無八萬四千竈王大神

南無右補處造食炊母」

すなわち、竈神、柴を運ぶ力士、食母^{シンモ}（炊事婦）の神を供養するものである。金萬宝によると、これは本来シンバンがするものだが、坊さんがお経を読んで供養するのも効果は変わらない、また近所でもあるから、付き合いとして昨日の読経に加えて仕事をしてもらっているのだという。

さて金石のトランスが静まると、梁シンバンは庫裏で中断された成柱プリを再開した。12時半から秦シンバンが杖鼓^{チャング}を打ちながら成柱神の来臨を請い神門を開けるための歌を2時頃まで歌い続ける。

2時半、本堂で金法満スニムが読経を始める。チマ・チョゴリに着替えた金石はその脇で拝んでいたが、再びトランスが始まった。苦しそうな表情で目をつぶり、70センチほどの笹の枝を両手に持って座ったまま激しく振る。シンバンや数名の女性の信者たちも本堂に上がってきて見守る。囃子が始まる。笹の葉が飛び散る。3時過ぎ、仏壇前の置き鐘をゴンゴン打つとトランスはひとまず静まった。榊の枝に持ち換え、囃子をもっと速くと促しながら立ち上がってまた激しく舞う。鄭ボサルは結解^{コップリ}（体に布を巻き付けて結び目を作りそれを引いて結び目を解くことにより悩みごとの解消を表象する呪術）を行う。金石は静まりまた激しく舞う。

それがおさまると金石は一人で自分の身の上を語りはじめ5時まで続いた。

夕方、東大阪市の宮崎栄一市議員が来訪。在日住民の面倒をよく見る人で、金も東大阪市に住んでいた頃から色々世話になった恩人である。特別在留許可もこの人の尽力で得ることができた。近隣住民との騒音、いやがらせをめぐる問題、寺入口への通路工事許可の問題など相談する。萬宝に寺を案内されたあと7時頃帰る（宮崎氏は1991年死去）。その時、下の本堂では、一人の信者が梁シンバンによって裂布（長い布を裂いて、悩みの解消を表象する呪術儀礼）^{コップリ}結解による祓いを受けていた。よその霊が憑いてしんどいと訴えたので。このようにクッには予定にない拝みが臨時に挿入されることがある。8時前に、今

日の行事終わる。

金によると、儀礼の順序は一応決まっていますが、玄金石の例にみるように、憑霊のタイミングや持続時間を完全にコントロールすることは出来ないと言う。予期しないときに長時間にわたって霊が降りそれがスケジュールを狂わせることがしばしばある。この日は、金石の長く激しい憑霊にのため成柱プリは一日繰り延べられることになった。

8月30日

6時、萬宝読経。

8時30分、秦シンバン、^{ソング}成柱迎えを始める。巫歌と監床旗によって成柱神を賽神堂の祭壇に迎え入れる。

9時45分、成柱プリの中心である「^{カンテゴンヌモクス}姜太公首木手」の聖劇儀礼が始まる。これはシンバンが大工の神である^{カンテゴンヌモクス}姜太公首木手に扮して家而建てその家の吉運を占うもので、滑稽な動作と珍妙な問答によって、笑いと気楽な雰囲気の中で行われる。まず秦シンバンが、大工の棟梁の神である^{カンテゴンヌモクス}姜太公首木手の名を呼ぶ



写真 8

大工の神、^{カンテゴンヌモクス}姜太公首木手に
扮して現れたシンバン

と、白い鉢巻きをし、斧を担ぎ、籠を肩に掛けて姜太公^{カン テ ゴン スモクス}首木手に扮した高シンバンが踊りながら現れる。

秦シンバンは姜太公^{カン テ ゴン}に賽神堂^{クツタン}に入るよう頼むが姜太公^{カン テ ゴン}はのりりくらしと踊ってなかなか入らない。そこでシンバンは白い晒し布^{カン テ ゴン}を姜太公^{カン テ ゴン}の首に掛け引っ張り込む。大工道具などについての珍妙な問答をしたあと、シンバンは姜太公^{カン テ ゴン}に家を建ててくれるように頼む。姜太公^{カン テ ゴン}は斧を研ぎ、金保伊シンバンはそれを持って建物内外の柱などを材木に見立てて伐採する仕種をする。そして祭壇に祀られていた笹竹（霊木）を建物内部の柱に立て添わせ、斧で実際に断ち切る。伐り出された木材をあらわす竹棒などを晒し布で括って部屋の真ん中に引き入れる。そして二個の林檎を二つに切って四方に伏せて基礎としそれに竹棒を差し立てて柱とし順次ひもと竹棒で二階建ての家の骨組みを作り紙を敷いて床と屋根を作る。「家」が出来上がるとその床下に天文^{チョンムン}（占い銭）を入れた碗を置き、この天文^{チョンムン}を神刀で弾き出して建物の方位、風水を占う。吉と出た。その屋根の上に米、餅、紙幣を備えて、再び神刀で占う。祭場の入り口の梁に干し魚をぶら下げる。門神への供養であろう。これらが済むと「家」は解体された。

秦シンバンは数珠を首に掛け僧形を表わす白い紙帽子をかぶり、パラン（小シンバル）を持って舞い、また神刀で占う。金石はじめ他の参観者たちは、ゆったりした囃子にあわせて一緒に踊る。ソクサルリム、すなわち神とともに踊り遊ぶのである。

次に入りに口に向って置かれた小膳のうえに、三輪の切紙の花（三つの棟のための成柱神の依り代）、大きな甑餅その他果物、魚、米、スープなど祭壇に供えられていたものを移し、高シンバンが門前本解^{ムンジョンホンブリ}（竈や門など家の神々の神話）を歌って成柱神を送り出す。成柱^{ソンジュ}プリはこれで終了した。

3時から、次の祭事である船王^{ソナン}プリの初監祭^{チョガムジェ}が始められた。秦シンバンが正装し、祭りの主旨を語り、ソナンを呼び迎える。ソナンは船の神であると同時にトッケビとも呼ばれ、ある時は災厄をまたあるときは幸運をもたらす気まぐれで気難しい霊鬼である。海村に生まれた萬宝と金石はこれをよく祭らなければ

ばならない。萬宝は3年ぶりにこれを行うことになり、心身の不調を祓いたいと思っている。「このごろ背中が冷たく眩暈がする。市場で倒れたことがあり、夜眠れないこともある。病院へ行っても何もないという。何か心が淋しい、孤独なことばかり考える。家の祟りだ。生野区の自宅の屋根を西の方に少し延ばしたが、これが良くないことだった。また信者さんの家にはそれぞれややこしい家門の神がいてクッをするとそれが自分たちにひっ付いてくることがあり、これも自分たちが病気になる原因になる。それで定期的にソナンを祭って、自分たちのためのクッをしなければならない」という。金石は、霊能者として出発するにあたり、よい霊が自分に着くように祈願しなければならない。成柱プリが建物のための儀礼であったのに対し、これは人のための儀礼である。ただ今回見るような金石の激しい憑霊が船王プリの枠内に入るものかどうかは曖昧である。初^{チョガムジュ}監祭は夜8時まで続く。

9時からは、人々の遊びの場となる。萬宝がチャングを打って拍子をとると、見物の女性たちが踊り始める。金石がマイクをさしだすと萬宝は民謡を歌う。金石が歌い、つぎに梁シンバンにマイクが渡ると、萬宝を始めいろいろな人の仕種や言葉の物真似をはじめ一同腹を抱え笑い転げる。神を楽しませ神と共に遊ぶひとときである。

8月31日

6時半より萬宝読経。

8時半より初^{チョガムジュ}監祭^{ソナン}続き。昨日の神迎えに漏れ落ちた神々を招く。鄭^{チョン}ポサルが、賽^{クッタン}神堂の祭壇で拝み、つぎに本堂の祭壇で拝んでいるうち、突然立ち上って滝跡へ駆け降り、上衣を脱ぎ、榊木の枝を流れる水で濡らし体にかける。金石にもその前へ来させ、枝で水をかける。滝の神である龍^{ヨウ}王が降りてきているのだという。

9時には着替えて賽^{クッタン}神堂で萬宝と金石にお祓い。赤青黄の三色の布を体に擦りつけては振り払い、二人の体に憑いているソナンとその家来を祓い出す。



写真 9

ボサルの布による祓い

鄭^{チョン}ボサルが急に怒りだす。萬宝の説明によると、彼の先祖の霊が憑いているという。ビール瓶をさあ飲めと一人一人の前に突き出し、激しい口調で語り続ける。今度は金石の祖父が憑いて、金石が寺を持つように助言したと言っており、さらに金石の祖父と萬宝の祖父が言い争っているという。憑依状態の鄭ボサルは激しい口調で「萬宝は寺をまつらず、金石がまつれ。龍王^{ヨワン}のために滝をもっと良くしなければならん。そうすればこの神は苦しむ人に功德をくれるだろう。寺はこれから繁栄するだろう。3年経てばすべて良くなる。」と言う。萬宝は、生野の自宅を買った時は自分の名義にしたので、今度はこの寺の名義は金石のものにすることにしたが、実質的な住持職を金石にさせるとまでは考えていなかったようだ。しかし鄭ボサルの口から出る言葉はそれを命じている。

正午前：鄭^{チョン}ボサルによって金石に霊をつける儀礼がまた挿入される。

賽神堂^{クツタン}の祭壇から庭、石段を経て法堂までの通路に白布が敷かれる。金石は、祭壇の前に赤い布を抱いて座り、鄭ボサルが杵と笹の枝を持って祓う。

1時半、金石、家に不動尊像を取りに帰る。これは金石が成田不動の靈感を受けた後、買い求め家で祀っていたものである。鄭ボサルに憑いた神が、その

像はこの寺でちゃんと祀らなければならないと命じたためである。

14時。玄宝倍シンバン、^{コンニヤン}供宴を始める。供物を神々に勧める歌である。

16時。船王^{ソナン}プリ。激しい囃子のリズムで萬宝が踊り始める。これはトランチュムとよばれ、倒れるまで舞い踊って、憑いているソナンを祓い出そうとするものである。赤い布を振りながら舞い、また玄シンバンと梁シンバンが布で萬宝の体じゅうをさすり祓いや結解をする。ソナンがシャツを欲しがるので、萬宝が着ている下着を脱がせ、黄色い布を丸めて火に見立て、ソナンに早く退散しないと火を付けるぞと脅迫する。これらの踊りと払いは3回ほど短い休憩をはさんで21時頃まで続けられた。

9月1日

6時半、この日は金石が読経。朝の読経は住職が寺の日課として行うものである。前日の鄭^{チョン}ボサルの言葉を受けたものであろうか。

7時頃より、滝行場の整備。流路に落ちた岩石を掘起こし、流れの脇にブロックとコンクリートで足場を造る。これも鄭ボサルの前日の言葉によるものであろう。近くに住む日本人の植木職人も手伝ってくれる。この人は前日も孫を連れて遊びに来ており、この寺の人々に好意をもっている。

船王^{ソナン}プリの続きを秦シンバン始める。再び萬宝の踊りと祓い。鄭ボサルは、出刃包丁をもって怒り罵りながら萬宝の体をつつき（見ていてはらはらするが、決して傷はつけない）、最後にスイカを萬宝の頭にぶつけて割りその実を萬宝の口に押し込む。これらはソナンを脅迫し追い出そうとするものである。

3時から、一人の信者ともう一人の食母^{シンモ}がお祓いを受けた。

4時前より金法満スニム、賽神堂の窓に向けて置かれた供物膳の前で読経する。金石は、その横で合掌するうち、次第にトランス状態になってゆく。そして経文を持って開いたり、神刀を持ち上げたりする。萬宝によるとこれは、金石が自分はこれから「お経」で生きるか、すなわちボサルになるのか、それともシンバンの道に行くのかを占っているのだ。明確な答えは出ず、結局「この

人は半々やな」という。

5時半、金石、「天王竹」（2.5メートルほどの笹竹）をもって、激しく振り回しながら舞う。そこにいる人、一人一人の運勢を告げる。そして石段を駆け上がって本堂に上りそこでも激しく舞う。これもトランチュムということが出来る。



写真10

トランス状態で
激しく舞う玄金石

「^{チヨワン}天王」は「地王」「人王」と対応するものだが巫俗神の中での位置付けは不明である。「天王竹」を持って振ることにより「^{チヨワン}天王」が降り、それに付いて様々な神や霊が降りてくるのだという。「金石の祖父、母、母の姉など皆降りてきて、これから協力するので心配するなと言っている。エンマ様、山神、海神そして寺の雑神も出てきて一緒に踊って遊んで別れを告げている。しかしこれは決まった順序にあるオガミではなく、この人の靈感でしているから一つ一つの詳しい内容は分からない」と萬宝は言う。すなわちこれは「^{ソテン}船王プリ」の枠内におさまらず、シンバンからすればイレギュラーな過程であることを示している。

6時過ぎ、祭場の入口脇に使者膳が用意され、鄭ボサル、太鼓を叩いて拝む。

7時過ぎ、滝の脇に信者が持ってきた石の観音像が据えられ金法満スニムと信者が読経。この信者は五十代の二世の女性で、夫の名で多額の寄付をし、一連の開寺儀礼の間、姉とともに終始寺に泊まり込んで諸行事を見守っている。

この人が家で観音様をまつたが良くないことが続くのでこの寺でまつてもらうことにしたという。これも臨時に挿入された儀礼である。

同じ頃、賽神堂で鄭ボサルが憑靈。エンマ様の使者を送り出す筈だったが、これがまたボサルに憑いて、怒鳴りながら色々な要求をする。衣類をたくさん欲しがり、体に沢山の色布をまといつかせ麦藁帽子をかぶり色布で括りつける。怒鳴ったり笑ったりしながら祭場をグルグル廻る。寺にいる人を皆呼び寄せ怒りの口調で一人一人に運勢を告げ、布を裂いてお祓いをする。一人の食母は着ているシャツや靴下を求められ脱いで与える。罵り続けるボサルにはみなしんとして肩をすくめ、誰も逆らうことは出来ない。ボサルはさらに多くの布をまとい、冥銭を持ってぶつぶつ呟きながら部屋を歩き回る。8時過ぎ、急に戸外に駆け出し、建物の横でまとっているものを脱ぐ。この瞬間、憑依は解け、平常にもどったように見えた。鄭ボサルは普段はやさしい人である。「うちは霊が憑くとよくこうなる。もっときれいな役をしたらええのに。こんな変なのばかりでいややなあ。」と言う。この人の内に普段抑え込まれた怒りや不満、恨みは、かつては彼女を「気がいい」にさせたものであったが、憑依した神霊の声という形を取るとき、それは在日の民俗宗教世界のなかで公認され、人々を逆らい難く支配する力をもつのである。

9月2日

9時半、金石は、チマ・チョゴリを着、首に数珠を掛けソナンに供える晴着を手を持って踊る。神刀、算盤で占い木魚を持って歌う。色布、白布を賽神堂から法堂まで敷き延ばし、色布を結び付けた天王竹を振りながら本堂に駆け上り、激しく笹を振って舞う。

昼の休憩時、市役所の職員が二人来て、近所からの騒音苦情を伝える。金石が応対して二人に帰ってもらう。「朝と夜は自分たちも時間を制限してやっている。皆が生きたために多少の音を出すのは仕方のないことやないですか。大抵の人は理解してくれているのですが」という（近隣住民とのトラブルについて

ては、紀葉子 1990 参照)。

1時過ぎ、エンメギ(厄祓い)。祭壇脇に、小膳をおいて供物を供え、3足のわらじにタバコと紙幣を重ねる。その前で、秦シンバンが^{メンガムホンブリ}冥監本解を歌う。これは自分の霊を捕まえにきたエンマ様の3人の使者をもてなし、エンマ様の寿命帳をこっそり書き変えてもらって長寿を得た男の物語りである。

3時前、萬宝拝礼。祭壇から布、冥銭などを降ろしてかさね、秦シンバンが萬宝家の運勢を占う。布、冥銭を外で焼く。雑鬼にも一杯飲んで帰って下さいと歌う。招かれなかったりもてなしの十分でなかった靈魂がいると、人にとりついて悪さをするからである。

5時頃、金石等が一匹の豚を丸ごと煮て四つに切り分けた肉を買って戻ってくる。生野区の朝鮮市場の店に注文しておいたものである。「豚を供えるのは、済州島旧左面細花里のオガミの習慣。亡くなった私の(萬宝)の長兄が細花里の担当シンバンだったので、自分のための儀礼でもこの豚のオガミは必ずする。」

送神。冥銭を焼き、占う。信貴山の神にも「寺の持主が変わりましたので宜しくお願いします」と祈る。豚肉を細かく切り、沢山の皿に盛り分けて供える。



写真11

晴着をもって舞う

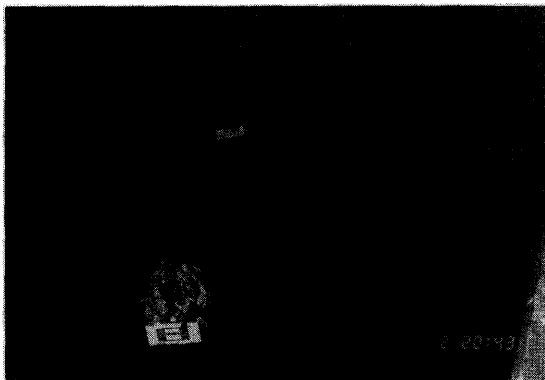


写真12

供物を積んで
流される「船」

秦シンバン、太鼓を打ちながら歌う。

発泡スチロールの3つの箱を3艘の船に見立て青赤黄の帆を飾り付け、供物を入れる。1つは萬宝のソナン、1つは金石のソナン、もう一つは萬宝の母が担当シンバンだった兎山里、松堂里の神のためである。供物は、飯、卵、モヤシ、モチ、焼き魚、精力ドリンク剤などで、ソナンの船にはさらに豚肉を入れる。秦シンバン、細花里^{ボンブリ}の本解を歌う。この神は海に浮かばないので船送りはしない。船をミニバンに積み込む。

7時前、金保伊シンバン、小豆を外に撒く。雑鬼にふるまうためであろう。

これで寺での行事はすべて終了した。お下がりの豚肉をおかず一同食事。

8時前、祭主夫妻とシンバン全員がミニバンに乗り込んで大興寺を出発。運転は高シンバンの日本人の妻。

9時前、超高層ビル群が聳える最新の大阪ビジネス・パークの一隅、大阪城を望む運河のほとりに車を止め、シンバン達が船を運び出す。萬宝と金石は車から出ない。せっかく祓^{ソナン}った船王や諸々の霊鬼たちにまた取り憑かれないためだ。シンバン達は、ドラを叩き歌いながら、三艘の「船」を運河に放り込む。赤、黄、青の帆飾りをつけた「船」は夜の運河のなかをゆっくりと下流に消えていった。

IV. シンバンと民俗宗教世界

さきに、この一連の儀礼過程は、主として5つの要素からなることを述べた。

すなわち (1)土地神拝み、(2)本尊の開眼法要、(3)成柱^{ソソグジュ}ブリ、(4)船王^{ソナン}ブリ、(5)女性職能者のイニシエーションであり、これに臨時的、付随的な儀礼要素が加わったわけである。この主要な儀礼要素における異種宗教者の関係について考えてみたい。ただ今回の儀礼はシンバンによる寺院の開創という特殊な事例であり、通常のシンバンによるクツとは異なるものであることを留意しておかなければならない。

今回の儀礼において、シンバンしかなし得ず、ボサル、スニムでは代替しえない儀礼要素として、初監祭^{ソソグジュ}や成柱^{ソソグジュ}ブリにおける「姜太公^{カンテ}首木^{ゴンス}手^{モクス}」の過程^{ゴン}、本^{ボン}解^{ブリ}の朗唱、三種の巫具を使う占いがある。シンバンはこれらの儀礼過程をクツの本質部分と考えている。

ボサル、スニムが儀礼の一過程を分担するとき、その職能（機能）が、シンバンのそれと異質である場合と同質である場合とがある。

僧が異質の職能を果たす例として、本尊開眼法要における読経が挙げられる。これは仏教寺院としての開創を演出するもので、純然とした仏教的形式が必要とされるものであり、シンバンの職能には決して含まれ得ないものである。この場合は、シンバンのもたない職能が要求されるが故に、仏教僧の参加が必要とされたのである。本来のシンバンのクツでは仏教僧ないし民間スニムの役割は必要とされない。

鄭ボサルの役割は、強い憑依能力を通して、様々な霊や神仏の怒りを語らせることにある。「シンバンは決まった順序通りにするが、ボサルは霊が乗り移ってそれが命じるままに動く」というように、シンバンの役割とはやや異なるものがある。シンバンも死者霊の口寄せをするが、それは一定のパターンに従うものである。すなわち、涙を流し声をあげて泣きながら、自分の苦しかった生活と死後も迷い苦しんでいることを語り、クツの後は迷いが晴れてあの世に行けるようになったことを感謝するものである。鄭ボサルの場合は、厄祓いや運勢告示といった予期されたはたらきをしばしば逸脱して、予想されない死者霊や神が現れ、怒り罵り様々な命令を下すのである。在日のクツにおいては激し

い降霊憑依はボサルが担うことになっているようだ。そしてこの人の場合は、その場にいる人々が心の中に持っているわだかまりや遠慮して言えないことを霊の言葉として皆の前でさらけ出す働きをする。今回それは、この寺の住職が誰であるべきかをめぐる金萬宝と玄金石との潜在的葛藤を死者霊の憑依・口寄せを通して人々の前に露呈させ、金石が住職であるべきと主張したわけである。またその場にいる人の行状についても人前で罵ることもある。それはその場に強い緊張をもたらすが、クツが人間の「恨」を解くものであり、人々の心にカタルシスをもたらさなければクツが終わり得ないものである限り、必須の過程であったといえよう。

これらに対し、地官による土地神拝みや、竈神の供養における僧の読経はシンバンの成柱ブリと機能が重複するものであり必要不可欠の儀礼ではない。また成柱ブリ、船王ブリにおいてボサルが行った祓いなどの補助的役割は本来シンバンの仕事である。

しかし金萬宝によると、それらはやり方は違ってもはたらき（機能）は同じなので、その儀礼部分を別の宗教者に代替させることは、なんの支障もないこととされる。すなわち機能の同質性は異種の宗教者の参加を排除するものではなく、むしろそれを容認する論理になるのである。

大阪において金萬宝はシンバンの伝統のみを排他的に守ろうとは考えていない。シンバンにとってボサルは、仕事すなわちクツの依頼を仲介し、また憑霊や祓いなどの「同質的」部分で協同しうる職能者として積極的な意味をもつ。誰にどの部分を依頼するかは、その時の事情すなわちクツの目的、人間関係状況、クツ全体の長さに応じて決めれば良いのである。それで、土地神祭には萬宝達が日頃尊敬する地官の老人に依頼し、憑霊と祓いの部分には、常に仕事を共にしているボサルに分担を依頼したのだと思われる。そして、スニムによる竈神の供養は、他の儀礼と平行させ行うことによってシンバンの負担を軽減させること、および近所の寺で住職を勤めるスニムとの「付き合い」（仕事・報酬の提供）といった意味が含まれている。主要な部分をシンバンが行い、他の

宗教的職能者には補助的部分を担当させ、全体の儀礼過程においてリーダーシップを持つかぎり、それはシンバンのクツとして十全な意義を保つと彼は考えているようである。

シンバン、ポサル、スニムは、その職能が異質であっても同質であっても、相互に補完性がある限り、一つの儀礼の世界を構成するために協同することができる。そしてクツの度に気の合うもの同志が必要な人数でチームを作る。彼らは相対的に独立した存在であり潜在的に競争関係にもあるので、このチームの紐帯は流動的で、しばしば離反、反目に替わることもある。ともあれ、シンバン、ポサル、スニムは、一つの民俗宗教世界と相互認知のネットワークを共有しているのである。

逆にいうと、機能的に同質の職能を持つ宗教者であっても、この相互認知ネットワークを共有しない宗教者は一緒にクツをすることはないことになる。儒教儀礼の祭官、キリスト教の牧師・司祭そして日本人の宗教者はこれにあたる。儒教式儀礼には、土地神祭が含まれ、この点で機能的同等性が認められるが、それは職業的な祭官を持たず、伝統的に巫俗の世界を抑圧蔑視してきたのであるから協同はあり得ない。キリスト教は、一神教なので、諸神諸霊と関わるクツの世界を認めることはできないであろう。ただ在日韓国人のキリスト教のなかには、シャーマニクな異言や現世利益を強調する韓国の純福音系の宗派も入っており、呪術性そのものと矛盾するものではない。また日本の民俗宗教者も呪術的でシャーマニクな特質を持ち（cf. 飯田, 1986 p.190）、機能的な相同性を有しているが、実際には日本の宗教は在日コリアンの宗教行動の中に一部限定された領域（葬式、寺社参詣、新宗教加入など）でのみ関わっており（cf. 西山, 1993）、在日の民俗宗教儀礼そのものへの関与はほとんど無い（例外として兵庫県の「韓寺」で日本人のポサルが活動していることが報告されている。（cf. 曹, 1990/91））。

V. 寺をめぐる社会的ネットワークの特質

在日コリアンの社会は、現代の日本社会の一サブ・カテゴリーとなっており、構造一機能主義的な意味での固有のシステムをなしているとは言い難い。政治的・歴史的規定は、在日社会の大きな枠組みであるが、むしろその生活実態は、個人や小集団の社会的ネットワークの束として成り立っている面が大きいのである。ここで、この寺の開寺儀礼に集った人々のネットワークについて見てみよう。

まずこの一連の儀礼に参加（もしくは出入り）した人々について簡単に触れておこう。金氏は、開寺儀礼の触れ状や招待状を出したのではないが、人々は口伝で金氏のこの一世一代の大事事を知って敬意を表しにやって来たわけである。本尊の開眼法要の行事に最も多くの人々が参加したが、それ以後も色々な人が訪れ、祝い金を置き、行事を見、食事をして帰っていった。知っていて来なかった人もいるであろうし、遠方にいたりその他の理由で、この口コミ情報からもれたために、参加できなかった人も当然いるので、金・玄夫妻のすべての人間関係ネットワークがここに現れている訳ではない。しかし普段の親しいつきあいのある人々の大半は、ここに顔を見せていると考えて良いと思われる。

参加者で名前ないしアイデンティティの判明した人は149名で、その3分の2を占める信者の名前は、撮映した写真および本堂に張り出された寄付者と寄付額を記した札によって確認した。しかしその家族や知人などの同伴者で名札に出ない人もいる一方、名札に出ていても実際には出席しなかった人もいるので、この名札は必ずしも出席者と一対一に対応しているわけではないが、近似的な資料として有効なものであると思われる。以下に記すその人々の属性は、金萬宝氏への聞き取りに基づいている。

まず参加者を儀礼との関係で分類すると表1のようになる。

「その他」を別にして、「信者」のうち5人が日本人である外は全員が、韓国人ないし朝鮮人であり、短期ヴィザで滞在中の2名のシンバン、1名の僧ま

た人数は不明だが少数の日本国籍取得者もここには含まれている。

「その他」19名の内訳は、市議員1，仏像納入者2，近隣住人3，調査見学者3，市役所職員2，漢方薬業者とその家族6，友人1，シンバン妻1で、男性11名，女性8名となる。またこの内，漢方薬業者家族2名が韓国人，見学者1名がイギリス人である他は16名が日本人である。このカテゴリーは寺と外部社会との関わりを示すものとなっている。

以下の記述では，全数149名から「その他」19名を引いた130名の人々の特性について考察する。

平均年齢は54才である（1988－生年＝満年齢，として計算）。

参加者の間には組織関係というものは全く存在しない。信者組織，シンバンないし宗教者間の組織といったものはなく，すべて個別の人間関係の寄せ集めであり，これは原生的ないし自然発生的ネットワーク（塩原 勉，1994，p.38）の束と呼ぶのがふさわしい。このネットワークはつぎのような特質を持っている。

①同郷性；参加者の91%，118名が済州島出身者（韓国他道出身者 4名，日本人5名，不明3名）であることはこの行事の基本的な社会的枠組みを構成している。またそのうち祭主夫妻の出身村である朝天面咸德里の出身者が26名，20%を占めていることは，同郷出身者のネットワークが強く生きているが，それは他村出身者に対して閉鎖的なものでないことを示している。

②近隣性；在日コリアンの最大居住地である大阪市生野区の居住者が61名，47%を占めた。この地域の在日のうち約7割が済州島出身者と推測され（洪承禪，韓培浩 1979，p.7では65%，李光奎 1983，p.131では72%），祭主夫妻もここに住んでいる。さらに生野区に隣接する東成区，平野区と東大阪市，八

表1．参加者関係別内数

信者	96
儀礼執行者	11
同業来訪者	8
祭主とその家族	5
玄金石親戚	5
食母	5
その他	19
計	149名

尾市の居住者は31名で、生野区居住者と合わせると92名、71%にのぼる。

③親族ネットワーク；参加信者の多くは2～5名の近親者と連れ立って来ておりこのような小グループが26組あり73名を数えた。単独参加の信者は23名であった。これら小近親グループ内の関係をみてみると、主婦と娘ないし嫁、姉妹、従姉妹など女性のみからなるもの10ケース、夫を含むものが11ケース、息子ないし弟を含むものが5ケースあった。これら親族小グループ間の関係は、疎遠であるように見えた。落慶祭のときも特に親しく振る舞いおしゃべりするという事もなく、この祭次が終われば、ばらばらに帰って行くのである。

上で見るように出身地と現居住地の二重の地縁性が参加者たちのネットワークの枠となっている。表面上、参加者は互いに無関係であったりせいぜい顔見知りというくらいの関係でしかないが、より深層では、ここでの集いがほとんど済州島出身者のものであることを参加者が自明のように理解しているのであり、このことが場の基本的性格を構成する要因となっている。

④シンバンと信者の関係は、安定したものではない。信者は大興寺もしくは金萬宝のみに関与するのではない。一般に信者と祈祷師の関係は、一定の信頼関係が保たれている限りで持続するが、固定的、永続的なものとは言えない。済州島に見られるような里ごとの担当シンバンという習慣はない。クツをして効果がなければ他の祈祷師のところに行くし、祈願の内容によって別の寺に行くことも普通である。

在日シンバンをめぐる社会的ネットワークは、2つの局面で、すなわち信者間の非組織性、シンバンと信者間の浮動性において、強い不安定性をもっているのである。

シンバンと信者の間のネットワークの特質は、大多数が済州島出身者であり大阪市生野区近辺に居住していることから生じる諸々の原生的ネットワークの上に、ばらばらの小親族グループないし個人がシンバンと直接の関係を結んで葡萄の房（クラスター）のように結びついている点にある。小親族グループないし個人のあいだを横につなぐ関係の構築あるいは組織化へのモメントは全く

みられない。

⑤男性信者；金萬宝シンバンの信者層の特性についてもう一点注目すべきことは少なからぬ男性信者の存在である。参加信者を男女別に分類すると表2のようになる。

男性信者の参加人数は96人中20名（20.8％）となっている。韓国でも在日社会でも一般に、儒教的祖先祭祀は男性の世界、巫俗儀礼は女性の世

表2. 信者男女別人数

女性	76名	(79.2%)
男性	20名	(20.8%)
計	96名	(100.0%)

界と言われるが、今回の儀礼において男性の参加も少なくないことが見て取れる。さらにこの寺の開創にとって男性信者は、多額寄付、建築協力、寺の売買仲介、融資口利きなど、重要な役割を果たしていることが注目される。金萬宝は「ここ（日本）では信者さんは私たちに良くしてくれる。済州島でなら、シンバンが寺を建てることもできないし信者がそれを支援することも考えられない」と言う。在日の男性社会でも、未だクツをしたりそれを話題にすることへの一種のタブー視が残っていることは事実であるが、呪術的危機処理といった動機を越えて、経済的成功に対する祖先への感謝、報恩の意を込めたクツが男性信者の依頼によって催されることがある。これは、在日社会の巫俗儀礼の支持基盤と文化的性格が、韓国社会でのそれとずれてきていることを示している。シンバンによる「寺」の創立は、このような支持層の変化が条件となって可能になったのである。

VI. 在日社会における済州島巫俗文化の変容について

最後に、在日社会における済州島巫俗文化の変容について整理してみたい。そして、シンバンをめぐる民俗宗教世界が、在日コリアン社会のなかでどのような意味を持つか、さらに現代日本の文化および社会のなかでどのように位置付けられるのかを考えたい。

濟州島の巫俗文化の伝承性とその変容について、次の3つの点で考えてみよう。

①巫俗儀礼の伝承と混交化；一週間におよぶクツが、生駒山などの朝鮮寺で頻繁にもたれ、その中心部分において濟州島の正規の資格を認められたシンバンによるオーソドックスな巫俗儀礼が行われている。しかしオガミの場においてシンバンと在日社会で自己形成を行ったボサル、スニムなどの祈祷師さらに韓国仏教僧との協同が見られる。シンバン、ボサル、スニムは日本の修験道宗派の免状を得ようとし、ボサル、スニムのあるものは滝修行ばかりでなく、吉野山、大峰山、高野山などで登山参詣を行っている。韓国においては明確な区別がある巫俗と仏教の境界が在日社会では曖昧になってきているといえる。

②「女性の文化」から「在日の文化」へ；巫俗儀礼の多くは、女性を依頼者として、家族の危機処理のために行われ、男性中心的な儒教的祖先祭祀に対して劣位におかれ、シンバンへの差別意識も残っている点は本国と共通である。しかし在日社会では、前述のように男性のクツへの参加および男性信者の依頼によるクツも行われ、巫俗儀礼の女性文化的性格がいく分弱まってきているといえる。そこには「女性文化」から「濟州島の伝統文化」への意義変更がなされているように思われる。そしてこれは、儒教的祖先祭祀が男性文化性を緩和（cf. 飯田, 1990）され、民族文化の象徴と見なされて来ていることに対応していると思われる。巫俗儀礼はこのように在日社会の中での重要なサブカルチャーをなしているとともに、日本社会の中の在日文化としてのサブカルチャー性も持っている。

③共同体性から都市性へ；在日社会では出身村を中心にしてほぼ濟州島出身者ネットワークの中でこの巫俗文化が保持されている。しかし次の点で共同体性は薄れ都市的性格が加わっている。1. 私事化；濟州島でかつて盛んであり現在も一部残っている、地域共同体の行事としての堂^{タシ}クツ（玄容駿 1985 p. 22）は、在日社会では全く見られない。クツはすべて個別家族、または個人依頼によって行われる。2. 流動化；濟州島でみられた村ごとの担当シンバン（メイン・シンバン, cf. 玄容駿 1985 p.40）といった慣習は大阪では見られ

ない。済州島出身者のネットワークの中での時には熾烈な自由競争が、シンバンを含む祈祷師の間で繰り広げられている。リーダー格のシンバンを中心にチームが組まれるがそれは永続的なものではなく離反と集合を繰り返している。

④超国境性；シンバンは、在日社会の中で親からその職を受け継いだ人もいるが、済州島からやって来る人もいる。かつては密入国のケースもあったが、今日では短期来日のケースが多い。大規模なクツは、済州島以上に頻繁に催されるのでシンバンが来日して手助けに加わることも多く、また報酬も済州島でよりも多額なので、一度来た人は繰り返し来日するようになる。大阪と済州島を結ぶ宗教者のネットワークがボーダーレスに形成されている。

以上にみられるように大阪の済州島出身者社会は、日本社会の一部を構成しつつ故郷との強いネットワークのなかで、独自の巫俗儀礼の文化を保っている。アメリカの都市社会学者 C. S. Fischer は、大都市の少数民族社会ではホスト社会の生活文化への同化の流れのなかで自らのアイデンティティへの危機感が生じると、改めて自覚的に選択された民族文化を再創造することで、そのアイデンティティを再確認する運動が発生するという (cf. C. S. Fischer 1975)。若い世代による「生野民族文化祭」はこの典型的事例といえよう。しかし、在日済州島人の巫俗文化は、アイデンティティ危機への反応というより生活の中の祈りそのものであり、上のような自覚的、反省的な運動とは異なる展開の論理を持つものである。すなわち、日本社会のなかで在日巫俗は、原生的な伝統的宗教活動の生命力を示すとともに、在日コリアンが、その死者霊の「恨」という形で表現される自づからの「ルサンチマン」をいかに解くかという今日なお解決されていない歴史的社会的課題と結びついているのである。

附記； この小論は「어느 在日巫俗寺院의 誕生 — 儀礼過程과社会的 네트워크 分析—」（玄丞桓訳、『済州島言語民族論叢』、1992年、図書出版済州文化所収）の日本語原稿に修筆を加えたものである。

最後に、金萬宝・玄金石夫妻の全面的な御協力に御礼を申し上げます。

文 献

- 張 筭 根 1985 『韓国の民間信仰』, 金花舎
- 曹 奎 通 1990/91 「生駒・宝塚の韓寺を歩く」(前・後)『済州島』No.3, 4 新幹社
- Fischer, Claud, S. 1975 Toward a subcultural theory of urbanism, American journal of sociology, vol.80, no.6
- Hardacre, Helen 1984 "The religion of Japan's Korean minority" Institute of East Asian studies, University of California, Berkeley
- 洪承禔, 韓培浩 1979 「在日同胞の実態調査」, 『在日朝鮮人史研究』第4号
- 玄 容 駿 1980 『済州島巫俗資料事典』, 新丘文化社(ソウル)
- 玄 容 駿 1985 『済州島巫俗の研究』, 第一書房
- 飯田剛史 1986 「現代宗教の社会心理」, 『社会心理学を学ぶ人のために』間場寿一編 世界思想社
- 飯田剛史 1987 「十王祭ー生駒の朝鮮寺儀礼ー」, 『日本宗教の複合的構造と都市住民の宗教行動に関する実証的研究ー生駒宗教調査ー』塩原勉編 大阪大学人間科学部
- 飯田剛史 1988 "Folk religion among the Koreans in Japan - The shamanism of the Korean temples -" Japanese Journal of Religious Studies vol.15, No.2/3
- 飯田剛史 1989 「在日韓国・朝鮮人社会における仏教および民俗宗教寺院の諸形態」『研究年報』Vol.15, 富山大学日本海経済研究所
- 飯田剛史 1990 「在日韓国・朝鮮人の祖先祭祀と民族意識」, 『国際宗教ニュース』No.13
- 金 賛 汀 1985 『異邦人は君が代丸に乗ってー朝鮮人街猪飼野の形成史ー』, 岩波書店
- 紀 葉 子 1990 「在日シャーマンの宗教儀礼」, 『立命館産業社会論集』Vol.26- 3
- 李 光 奎 1983 『在日韓国人ー生活実態中心으로ー』, 一潮社(ソウル)
- 西 山 茂 1993 「混住コミュニティの宗教変動ー日本宗教への在日コリアンの関与を中心にー」
蓮見音彦・奥田道大編『21世紀日本のネオ・コミュニティ』東京大学出版会, 第四章
- 塩 原 勉 1994 『転換する日本社会』, 新曜社
- 宗教社会学の会編 1985 『生駒の神々ー現代都市の民俗宗教ー』, 創元社
- 杉原薫, 玉井金吾編 1986 『大正/大阪/スラムーもう一つの日本近代史ー』新評論
- 徐龍達編 1987 『在日韓国・朝鮮人の現状と将来』, 社会評論社
- 谷 富 夫 1989 「民俗関係の社会学的研究のための覚書きー大阪市旧猪飼野・木野地域を事例としてー」, 『広島女子大学文学紀要』, 24号

頁	行	誤	正
6	8	稀 <u>太</u> の大泥棒・	稀 <u>代</u> の大泥棒・
30	8	われわれモデルで考察	われわれのモデルで考察
33	23	<u>三</u> 十年も前に労働価値説	<u>30</u> 年も前に労働価値説
38	25	Selbtentfremdungを意識	Selbstentfremdungを意識
80	11	Ⅲ．開 <u>寺</u> 儀礼の過程	Ⅲ．開 <u>創</u> 儀礼の過程
82	12	願するもの、これを	願するもの、これを
84	18	司会は金仁培氏、 <u>萬</u> 宝と	司会は金仁培氏、 <u>萬</u> 宝と
86	18	東京都 <u>安</u> 立区に住んで	東京都 <u>足</u> 立区に住んで
91	25	表象する呪術儀礼)	表象する呪術儀礼) と
95	11	正午前： <u>チ</u> ン 鄭ボサル	正午前、 <u>チ</u> ン 鄭ボサル
104	3	構造 <u>一</u> 機能主義的な	構造 <u>三</u> 機能主義的な
裏表紙	15	Takfumi Iida (71)	Takafumi Iida (71)